

博士論文要旨

題目：近世における啓蒙的文芸の研究 ―実用的散文の展開―

湯浅佳子

本稿では、近世散文における啓蒙的性格に注目し、その生成の背景を探るとともに、文芸性をいかに確立しているのかについて考察した。

第一部では、近世散文の確立期である仮名草子についての考察を行った。第二部では、近世中期の談義本・説話考証随筆と近世後期の読本について、思想的背景や文芸作品としての作り方を考察した。

第一部 仮名草子の生成基盤

第一章 仮名草子と中世文芸

本章では、万治・寛文期の仮名草子における前代文学の享受について考察した。

一、『詞花懸露集』の成立

艷書文例集『詞花懸露集』の諸本調査を行い、啓蒙書・恋物語としての性格について考察した。

二、『薄雲恋物語』考

仮名草子『薄雲恋物語』が、謡曲や先行仮名草子に拠り、近世的作品を作っていることを述べた。

三、『錦木』の性格

仮名草子『錦木』が類題和歌集や歌学書に拠り、啓蒙書・読み物としての性格を備えていることを述べた。

四、『安倍晴明物語』と中世の伝承

『安倍晴明物語』は『簗簗抄』を大枠とし、中世辞書や注釈書等をも利用する。

第二章 仮名草子と思想

本章では、明暦・寛文期の仮名草子における思想の享受について考察を行った。

一、『他我身の上』の三教一致思想

仮名草子『他我身の上へ』が『莊子麤齋口義』や四書集注に拠り、処世術を説いていることを考察した。

二、『清水春流と護法書』

仮名草子『嵯峨問答』が『寂莫草新註』等の仏家護法書の説を仮名の文体で平易に述べていることを指摘した。

三、『うしかひ草』と『十牛図』『牧牛図』

仮名草子『うしかひ草』が、禅書『十牛図』『牧牛図』を平易に解いた書であることを述べた。

四、『伽婢子』の仏教説話的世界 ―教養としての儒仏思想の浸透―

仮名草子『伽婢子』が、儒仏一致思想の教訓とともに読み物としての興味を備えていることを指摘した。

第三章 仮名草子と怪異譚

本章では、仮名草子における怪異譚の成立背景と、怪異性の変遷について考察した。

一、『曾呂里物語』二話 ―その怪異性について―

仮名草子『曾呂里物語』の二話をあげ、その奇談的性格について述べた。

二、『曾呂里物語』の類話

『曾呂里物語』の諸話について、類話をリストアップし比較考察した。

三、怪異説話の展開 ―『曾呂里物語』と『宿直草』―

仮名草子『宿直草』が『曾呂里物語』に拠り、人間描写重視の話として展開していることを述べた。

四、『宿直草』の創意 ―巻四の十六「智ありても畜生はあさましき事」―

『宿直草』巻四の十六と『無門関』『三国伝記』や狂言「こんくわい」との比較を行い、仮名草子の特徴について考察した。

五、助と累 ―『死霊解脱物語聞書』より―

『死霊解脱物語聞書』での人物描写から、人の心の奥深さが描かれていることを述べた。

第四章 仮名草子と歴史

本章では、寛文・延宝期の仮名草子・軍書における歴史叙述の方法について考察した。

一、『鎌倉管領九代記』の歴史叙述の方法

仮名草子・軍書『鎌倉管領九代記』が、『喜連川判鑑』関連書を骨格とし、歴史読み物を創作していることを述べた。

二、『鎌倉北条九代記』の歴史叙述の方法

近世軍書『鎌倉北条九代記』が、『將軍記』を骨格とし、『吾妻鏡』『日本王代一覽』『太平記評判秘伝理尽鈔』等の記事に拠り歴史を記していることを述べた。

三、『鎌倉北条九代記』の背景―『吾妻鏡』『將軍記』等先行作品との関わり―

『鎌倉北条九代記』の各記事について典拠・類話を一覧化した。

四、『北条記』『東乱記』『小田原記』について

戦国軍記『北条記』についての諸本調査を行い、一覧とした。

第二部 近世中期・後期散文への展開

第一章 説話考証『広益俗説弁』の研究

本章では、説話考証随筆『広益俗説弁』について、先行書からの説話引用の方法や思想的立場を考察した。

一、『広益俗説弁』の性格

説話考証随筆『広益俗説弁』は、儒者の視点から、林羅山等の言説を利用して俗説を考証していることを述べた。

二、『広益俗説弁』と周辺書 ―俗説の典拠類話と俗説批評の背景―

『広益俗説弁』の諸話の典拠・類話を一覧化し、説話・思想的見地から考察を加えた。

三、金王丸と土佐坊昌俊 —『広益俗説弁』巻十二より—
『広益俗説弁』巻十二、金王丸と土佐坊昌俊の話について、出典を述べ構成方法を考察した。

第二章 三教一致思想と談義本・読本

本章では、近世中期・後期散文文芸の談義本・読本における思想的性格を考察した。

一、増穂残口の神像説 —『先代旧事本紀大成経』との関わりを中心に—

談義本『有像無像小社探』の言説が『先代旧事本紀大成経』の有形の神の説等に拠ることを述べた。

二、大江文坡の談義の方法 —『成仙玉一口玄談』を中心に—

談義本『成仙玉一口玄談』の言説が、禪の教えに基づき、新奇な表現を工夫していることを指摘した。

三、『南総里見八犬伝』と聖徳太子伝

読本『南総里見発見伝』の大江親兵衛物語が、当代の聖徳太子伝に拠って創作されていることを述べた。

四、聖徳太子と瓢箪 —『先代旧事本紀大成経』から『聖徳太子伝図会』へ—

読本『聖徳太子伝図会』の聖徳太子伝が、『先代旧事本紀大成経』に拠って作られていることを述べた。

五、読本『小野篁八十嶋かげ』における篁説話の展開

読本『小野篁八十嶋かげ』が、仏教説話や妙見菩薩信仰の説をふまえて創作されていることを述べた。

(附録一)『先代旧事本紀大成経』の「神代皇代大成経序」

偽書『先代旧事本紀大成経』「神代皇代大成経序」を現代語訳し、各巻の概要と、思想的背景を考察した。

(附録二)『先代旧事本紀大成経』の「帝皇本紀」 —聖徳太子関連記事を中心に—

『先代旧事本紀大成経』「帝皇本紀」が、『日本書紀』『愚管抄』等をふまえ、虚構を施して歴史を記していることを考察した。

第三章 馬琴読本の世界

本章では、近世後期江戸読本の代表作とされる馬琴作品について、物語の構成方法や説話の享受方法について考察した。

一、『南総里見八犬伝』の犬と猫 —『竹篋太郎』と口承伝承との関わり—

『南総里見八犬伝』と、読本『竹篋太郎』や口承伝承との関わりについて指摘した。

二、『盆石皿山記』小考

読本『盆石皿山記』が、『奇疾便覧』や草双紙の説話に取材して創作されていることを述べた。

三、『新累解脱物語』考

読本『新累解脱物語』における因果応報の描かれ方について考察した。

四、趣向と世界 —演劇・草双紙から読本への影響—

『新累解脱物語』の浄瑠璃利用と、勧善懲悪の道理の描かれ方について考察した。

五、『三七全伝南柯夢』の楠譚

『三七全伝南柯夢』が、近世説話や当代の霊木信仰をふまえる。

六、『松浦佐用媛石魂録』における忠義と情愛

読本『松浦佐用媛石魂録』が、佐用媛伝承や説経・浄瑠璃に拠り、救済の物語を描いていることを述べた。

七、『近世説美少年録』と阿蘇山伝説

読本『近世説美少年録』第一回が、阿蘇神社関連の諸伝承をふまえて作られていることを述べた。

附章 近世説話の展開

本章では、近世から近代までの病に関する説話についての系譜と、主題の変容について考察した。

一、小野小町伝説の系譜 ―病める小町の話―

小野小町が悪疾を煩う話についての系譜を、近世・近代の小説から確認し、主題の変容について考察した。

二、人面瘡考 ―江戸時代の文芸作品を中心に―

近世・近代小説に描かれた人面瘡説話の系譜を辿り、怪異性や主題について考察した。